

ある小作争議指導者の生涯

占 賀 保 夫

一

ここ名古屋市緑区鳴海町字下拾貫目の南を流れる天白川沿い西脇公園の一角に、一人物の銅像が建っている。この人物は、かつて農民運動の父といわれた小作争議指導者で、大正十一年（一九三二）三月十三日夜半、瀬戸内海航路の宮崎丸から明石沖に消えた、当時京都大学教授、法学博士ときぞう雉本朗造である。

御影石の台石の上に立つフロックコートに身を包んだ等身大の像は、銅像建設委員近藤邦雄氏（現鳴海西部土地区画整理組合長）が「日本一の出来栄えだと自任している」と誇るだけあって、仰ぎ見る人は浩然と生けるが如き人物の再現と、躍動的、立体的な構成美に感動させられる。両手掌を重ね合わせた下のステッキを半開きにした両足の中、中央に置いて正に動意をふくみ、その顔貌は悠然たる風格の中に闘心を秘めた人間を体現している。その眼は前方に見開き信念の胸中をただよわせている。だが、この像が現在地に据えられるまでには幾多の曲折があった。それは正に小作争議指導者をめぐる人間観の変化でもあった。

生前の毀誉の巷の中にもまれ、死後も褒貶の渦に巻かれた人物、雉本博士の実人生は、苦難の続連であり、死去当



雫本朗造像、右後方の建物は雫本会館

時は日本の社会事情が農民運動を異端視する方向にあった。まして学究の実践活動は忌避される時代であったから博士の死は社会の片隅に追いやられていた。

それから四分の一世紀を経た昭和二十年（一九四五）。日本敗戦とともに博士の名は甦った。そしていま農民が仰ぎ見、地主側に組した人も、それを追想、懐かしく思う像となった。それは歴史とともに再評価された人間の姿なのである。

さらに昭和五十四年（一九七九）に至り、西脇公園横に三階建の雫本会館が竣工した。この館はかつての争議時代に博士の援助を受けた近藤邦雄、岡本栄氏など十五名が建設委員となり銅像建立時から立案していたもので、博士の不慮の死から連綿として六十年も続いた博士の死をいたむ祭祀の総仕上げであった。館内には争議中に不幸な死を遂げた同志の遺影が博士の遺影を中心に掲げられ、凄まじかった争議と、博士への敬慕の情を偲ばせている。

二

雉本朗造^{しきやう}は明治九年（一八七七年）一月十一日、愛知県愛知郡鳴尾町荒井（現名古屋市南区鳴尾町）に生まれた。鳴尾町は旧東海道の宿駅鳴海町の隣村である。雉本の系譜をたどると生家は製塩関係業務、醸造業を営んでいた旧家永井松右エ門の系統で、一家興隆の基を作ったのが初代永井松右エ門である。この一門から作家永井荷風が出ている。松右エ門は慶長十二年（一六〇七）村内に新屋を作り同地の製塩業者に融資したり、塩の買取り、販売を手広く行なって財を蓄えた。その横の星崎庄七カ村の塩田は約八十八町歩に上り業者は九十六戸、製塩高千三百五十石、最盛期には塩田百数十町歩、業者百余戸を数えていた。

いま東海道新幹線が走っているところも塩田が白く陽に照り返していたのである。この塩田が新田化されたのは享和三年（一八〇三）ごろからで、この新田開発が後に小作人の耕作権、小作権との係わり合いになってくる。このとき永井家では新田開拓にも手を染め、また七代目松右エ門は宝暦年間（一七五一）に、すでに醸造場を建て酒造を業としていた。このあと八代目松右エ門は大儒学者星渚で、文化元年（一八〇四）尾張藩家老志水甲斐守忠喬公の家臣格で仕官、ために醸造場を同族の永井小右エ門に譲った。これが雉本家直系の祖先である。

雉本姓の由来だが、これは「佳酒醸造を賜わりますように」と近在の氷川姉子神社に祈願したところ、その夜、白雉が醸造場に舞い込んだ夢を見た。縁起よし、と夢に出た雉にちなんで雉本姓を名乗ったのによる。改姓と同時に酒銘も「白雉」と命名し、この銘柄酒は明治三年（一八七〇）まで続いた。

雉本朗造は、この小右エ門系の六代目徳祐と妻さず夫婦がもうけた五男三女のうちの二女ひろの長男として出生した。間もなく弟孔仁が生まれたが、その誕生に先立つ頃から家運は衰退し始めていた。

家業は雉本朗造の実母ひろの兄兼吉が相続していたが、当人に商才はなかった。また明治維新後東海道の宿駅が廃止されたことは地酒の消費範囲を狭めたばかりか、灘酒の進出となった。こうした危機を乗り切るには兼吉は若旦那育ちの世間知らずでありすぎた。遊蕩の中に日を送り、資産は蕩尽、かつて本家の宝蔵、米蔵を並べ誇った豪商の家構えも影を失くした。明治の変動は雉本一家には没落の弔鐘であった。しかし、もし家業が衰退しなかったなら、雉本本人は、あるいは酒業で身を立てるようになっていたかも知れない。ここに歴史と個人の結びつきがいかに運命の糸となって人間を取り巻いているか、ということに思い至らざるを得ない、没落した一家は、昔日の栄華をよそに、醸造場の一隅で細々と日を過ごすまでになった。世間が急に狭くなった。そうした中に当主は死去、妻は実家に帰り雉本家は祖母さず、実母ひろの二人になった。この落魄生活のさ中に朗造が生まれているのだが、この女二人の生活の中に、母ひろは何かの機縁で鳴海町の古利瑞泉寺の雲水と親しくなり、この間に出来たのが雉本であると噂されている。ただ、昔の農村では普通のこととさえあったが、正式に結婚式を挙げていなかったことから話が興味本位に流れたものと見てよいだろう。なぜなら続いて弟孔仁の誕生があるからである。

他説によると実母ひろは松山長三郎という男を養子に迎え朗造を生んだあと、名古屋市に移り住み当時東区誓願寺という由緒ある寺の前で書画商を営んだ。朗造三歳のとき父死去し、その時すでに弟孔仁は母の胎内にあった。朗造十三歳のとき母は死亡し、このあと祖母さずに養育されたという。しかし鳴海町の町史研究に当たっていた土風会調べによれば、これは祖母と祖父兼吉とが混同されているらしく、事実上、さきに記した方が当たっている。

さて朗造の母ひろと相識した雲水は遷俗し生活することになり、夫婦は新天地を維新後の東京に求めた。ところが新生日本の首都では旧藩幕臣さえ生活に追われるという激動期であった。世間知らずの若夫婦に生活の術がある筈もなかった。生活は不如意となり、危機の連続から、とうとう東京生活に見切りをつけて帰郷した。そうして弟孔仁

が生まれたあと、雲水は切羽つまって妻子を祖母に預けて再び寺に帰った。

朗造の母ひろは、その後、縁あって隣村鳴海の酒造店主に嫁したため、朗造兄弟は祖母の膝下で幼年期を送ることになった。時に朗造五歳、孔仁三歳であった。この祖母の懐けが後年の朗造の実人生、性格に大きく寄与している。それは一口でいえば「一身を持すること厳」ということになる。

祖母は裁縫と機織りで孫二人を養育した。それまで豪商としての格式を重んじていた祖母は逆境を嘆かず、人に甘えぬ生活を信条とし、孫に対しては立居振舞に目をくばった。これは没落した旧家ということで子供が他人に軽んじられないこと、そのために人間自立の条件の一つとして礼儀作法と甘えの排除に人格形成を求めたからであった。

これに応じ朗造の頭脳は芳香を発した。五歳にして普通の算数をマスターし、百人一首を丸覚えして衆目を集めた。明治十六年（一八八三）地元の鳴尾尋常小学校に入学、学業は断然群を抜いて首位を保った。四年制の同校を卒業して愛知県第三高等小学校に進んでからも成績は二位に下がったことはなかった。いまでも雉本の従兄弟に当る雉本修造氏（元小学校教諭、現在名古屋市南区在住）は「朗造を見習え、いつも親に叩かれて勉強させられた」と述懐しているほどである。

明治十六年（一八八三）、異父弟守造、十八年（一八八五）に良造が生まれたが、このあと実母ひろは病死した。時に朗造十一歳の年である。祖母は重なる不幸を嘆いた。そして親に先立ち若くして逝った娘ひろの菩提を弔うため弟孔仁を京都府北桑田郡黒田村にある曹洞宗派地藏院に入山させた。少年朗造は祖母と二人だけになった。

この淋しさをまぎらわすように朗造少年は近くの石堀山に登った。山は海拔百メートルそこそこだったが、山裾には樹木しげり山頂からは目路はるか伊勢の海が一望の下に眼められた。現在この山の周辺には人家が押し寄せ東南角はブルドーザーで削り取られ、山上からの眺めは中部臨海工業地帯から吐き出す黒煙、黄煙が視界を遮っている。思

えば当時の風景は自然美そのものであった。伊勢湾に注ぐ天白川提防には青松が枝を張り、葦はその下に密生し、魚は清流に喜遊していたという。文人墨客にとっては、それこそ太田道灌の詠んだ「遠く成 近く鳴海の浜千鳥 声にて汐のみちひをはしる」そのままの姿であったのだ。これが朗造少年の郷土であり、山と川と海であった。彼はこれを受した。毎日のように愛するこの小山に足を運んだ。そこでは虚栄のない自然が展望できた。周辺の田畑では農民が身を屈めて働いていた。

母は死去し弟は遠く去った朗造少年は、この山を偽りのない自然界の姿として掴み、自分の悲しい心を知ってくれるものと考え、自からをここで慰めたであろう。長じて山登りを趣味をするに至ったのも、少年期の、かかる環境のしからしめるところであったろうか。

三

朗造少年は明治二十四年（一八九二）愛知県尋常中学校（後の県立一中）入学、二十九年（一八九六）東京第一高等学校合格、三十三年（一九〇〇）九月東京帝大に入学し法学を修め三十六年（一九〇三）七月最優秀の成績で独法科を卒業した。このとき御賜の銀時計を拝受した。時に二十八歳であった。東大時代は全学を通じ首席の座を保ち、東大では開校以来の才能と評され「雉本には齒が立たぬ」と噂されていたという。

東大卒業と同時に司法官試補として京都地方裁判所と同検事局で事務修得にいらした。明治三十六年（一九〇三）八月、京都大学法学部に講師として迎えられ、傍ら立命館大学で破産法を講義した。翌年六月助教授に昇格すると同時にドイツ、プロイセン州ゲッティンゲン大学、つづいてザクセン州ライプツヒ大学に留学、民事訴訟法の研究に励んだ。

留学期間中は日露戦争期に当たっていた。日本では軍事体制が整備進行され、三十七年（一九〇四）には徴兵令改正により後備兵役延長令が布かれるなど、軍事国家日本へのレールが敷かれつつあった。雫本は、この国内の変転と日露戦役を、いわば対岸から眺めていたことになる。

三年九カ月の留学を終え再び京都大学の教壇に立ち、民事訴訟法を講述する雫本の身心は気鋭に満ちていた。ここで注目すべきは、雫本は西洋崇拜を排していることである。孫引だが、法学志杯10巻9号に「我法学会に於ける流行病はハイカラ病にして一と述べてある。雫本は日本独自の法学を創ろうとしていたこと、学問の植民地的姿勢を悲しんでいたものであった。これは今日、ますます我々に反省を与えるものである。精力的な研究と情熱的な講義、またヘルヴィヒ（一八八五—一九一三。実質的民事法と形式的民事法との結合を意図した法学者）学説の詳細な論述は学生を魅了した。講義が二時間で済むところを一気に四時間、時には午後一時に済むのを五時までブツ通すこともあった。筆記に疲れた学生が、乱れた態度をとると「もっと真剣になれッ」と大喝一声した。研究には精密が加わり三十九年（一九〇六）七月、法学博士の学位を受けた。そこで同年十二月、京都の旧家出雲路興通氏の娘浪江を娶り、京都市左京区神楽岡八に新居を構えた。そこに祖母を招き、これまで自分を育ててくれた苦勞に報いることを喜んだ。生まれて三十三年目に始めて一家だんらんの空気を味った。深窓に育った新妻は、孤独の境をくぐり抜けた夫と祖母に仕え、雫本は心理的にも安心立命の境に入った。

新家庭には教え子がひっきりなしに訪れ、深更まで若者と談論風発し、その翌朝は、庭に作った矢場で二、三十本の矢を射た。的は真理と見え、矢は研究・実践と思えたらう。また書をよくし雅号を「樂山」とした。山を愛し楽しむこと、それは雅号にもなっていた。少年時代に登った石堀山の散策は後年に至り日本アルプス登山に変わったが、雫本の趣味といえ、この山と弓であり、書はいわば余技ともいふべきものだった。書をたしなむから人は「樂山」の

書を乞うた。彼はそれに応じて、よく漢詩を練って墨痕あざやかに認めて進呈した。

そのころの漢詩に「紛々慣習何以窮 回首十年一夢空 幸得驚手附驥尾 新編法冊致微衷」がある。これには雫本の人生観が脉打っている。謙虚さと同時に俗説への反発と、不合理から合理への転化意識を鮮明に刻んだ字の奥には常に新鮮な問題意識を持った学究の真情発露が潜んでいる。

その問題意識のあるところ自己精進は続けられた。尨大な資料集めは精力的に進められた。そうして書き上げたものには大正六年(一九一七)刊の「判例批評録第一巻」があり、引続き大正十年(一九二一)第二、第三巻を著わした。死後昭和三年(一九二八)に「民事訴訟法論文集」が刊行されたが、雫本生前の著作刊行は、以上数冊に止まった。しかもこの著作は、先の理論構成の精密度から、現在なお新鮮さを放っており、関係者にとっては参考文献・指針の役割を果たしているという。「雫本なくして今日の民事訴訟なし」と称えられるのは、この著作に凝結している合理追及心からである。

研究を支えてくれる妻浪江との間には結婚二年目に長女みどり(後に長木肇に嫁す)が誕生した。大正二年(一九一三)に長男康雄が生まれたが、同年祖母さずは他界した。大正五年(一九一六)に二男、八年に三男国雄(現在東大阪市で会社勤務)が生まれた。うち長男次男は若死した。

さて雫本は象牙の塔にこもって事を済ます青白き学究ではなかった。「医学の進歩に臨床実験と病院が必要なのと同様、法学にも付属病的性格の機関が必要だ」と力説していた。その一つとして大阪市修道町に大日本法律研究所を設置した。また、そうした現実指向性が強く示されたのは明治四十年(一九〇七)当局から委嘱されて練り上げた「台湾法典調査」である。これは雫本が中心になって実地踏破した成果で大正八年(一九一九)に終了した調査報告書である。この時の調査結果は認められて勲四等に叙せられ、旭日小綬章を授けられた。ところが、この実態調査の

経験があとの小作問題にも大きな素因を持つことになるうとは、その時夢にも思っていなかった。

この理論と実態調査の統一体として発表された結果は「台湾旧慣習調査会報告書及台湾土地調査規則等」となっており、まとめられた。これは台湾における日本人小作人（小租戸）に土地所有権を認め、日本人の地主（大租戸）には、その収穫の一部取得の物件を認めるものであった。これは雑本の論でもあった。それが台湾で認められた。ということは当時、日本内地で一般化していなかった地主对小作人間の生産物分配の方法が植民地では実行されるということであり、それは日本においても許される先行形態である、と雑本は感得した。ところが、これが内地では円滑に進まなかった。植民地では許される法律が本国では実行されぬ慣習にしかすぎなかった。それは日本の植民地観と内政の矛盾であった。この先行形態を内地で推進するには内政が余りにも封建的であったこと、そこに地主的官僚国家としての基盤が存在していたことであり、結果的には雑本は、この落差につまづくことになる。

「小作は、たいてい賃借小作となっている。ところが、賃借小作は、債権関係なのだから、地主が変れば新地主に対抗することができず、小作米が一回でも滞れば契約を解除されて土地明渡を求められるというふうに、小作人の地位は極めて薄弱で不安定である。明治大正から昭和の初めにかけて頻発した小作争議の由って来るところも、多くはそこにあるので、ずいぶん古くから耕作権の強化を基調とする立法の必要が叫ばれてきたけれども、何分にも利害が入りこんでおり、全国にわたって地主の勢力が強く、しかも慣習や実情が区々であるなどの関係から、統一的な法律の制定をみるのが困難であった。」（末川博「物権法」第三章永小作権総説「昭和三十一年 日本評論社刊」）

もとより雑本の学説が、そのまま、戦後日本の現状にストレートに当てはまるとも考えられない。雑本の学説は引用されるには価するが、それも直接的に現実に適用するには時代的なズレがある、との評価になっているのは、これまた社会発展の証明であろう。さきの台湾における小作権の存在が、そっくり日本（鳴海町）に該当されなかったの

もさることながら、当時その価値を認められていた論文「挙証責任の分配」（昭和三年十二月二十八日内外出版印刷刊行）についてもあてはまる。それは Leo, Rosenberg の学説による一般要件、法律要件分類説が流入され、妥当性があると認められ、雉本もこれにならっているが、すでにこの分類は現今では行なわれていないことにも覗える。それでもなお敗戦後の昭和二十六年（一九五一）には司法研修所で、この論文が教材となっていたことは、雉本の学説が歴史的限界性を有しているにせよ、その息の長さを感じさせるに十分であろう。

だが、それが当時において、なお注目に値する合理性、適応性、説得性を有していたために、逆に彼の歩み方は地主国家権力、その地域的な現場にあっては異端であった。

法律要件説にもいくつかの種類があるが、わが国において通説とされているものは、雉本博士によって代表される特別要件である。この説の要旨は、権利の存在を主張する者は権利発生の特別要件事実についてのみ挙証責任を負い、権利発生の一般要件の欠缺及び権利消滅の要件については相手方が挙証責任を負う、というのである。この説の具体的な適用の結果はほとんど前述の原則による分配と同一であり、いわゆる一般要件とはほぼ前記の権利障害規定の要件事実に当るわけであるが、権利発生の特別な消極要件である但書の要件事実をも一般要件として説明しなければならぬところに無理があり、虚偽表示、要素の錯誤等のいわゆる一般要件欠缺の挙証責任が相手方にあるのは、それが一般要件だからではなく、実体法がたまたまそれらの事実を権利の不発生（発生の障害）という法律効果の要件として規定しているためなのだから、挙証責任の分配に關し特別要件と一般要件を区別する合理的根拠はない。この説は、一般要件の欠缺の挙証責任が相手方にあることのみならず、権利消滅要件の挙証責任が相手方にあることの根拠をも、結局、公平の原則（両当事者の訴訟法上の地位を可及的に同等ならしめんとする要求）によって説明する。しかし、挙証責任の分配は、前述の通り裁判が実体法の適用であることと実体法規が上記のような構造を有することから、当然導き出されるのであって、あえて公平の原則によって説明しなければならないものではないし、公平の原則によってすべてを説明するならば、法律要件説をとらねばならぬ論理的な必然性はない。尤も公平の原則は挙証責任分配の最も重要な理念ではあるが、立法者がこれによって挙証責任分配を定めた場合でもそれは立法の動機たるに

止まりその内容をなすのではない。すなわち、公平の原則はあくまでも立法者に対する指標であって裁判官に対するそれではないのである。まして公平の原則は挙証責任分配の唯一の理念ではなく、立法者は或る権利をなるべく行使しやすくしようとする政策的考慮（特別の不法行為に關し加害者に無過失の挙証責任を転換する等、例、自動車損害保障賠償法三条）や紛争の迅速簡明な処という見地（例、同時危遭遇者について同時死亡の推定を設ける立法例）から挙証責任の分配を定めることもあるから、公平の原則のみによって挙証責任分配の原則を説明すべきではない。のみならず具体的な場合に何が公平に合するかという判断は各人の主観によつて千差万別であり（このことはローゼンベルグの強調するところである）、ときには事実の性質による立証の難易の判断と同一に帰することがあるので、公平の原則は特定の権利に關する挙証責任分配の基準とはなり得ないのである。（岩松、兼子「法律実務講座」民事新訟訴編・有斐閣昭三九・六）

四

台湾における雑本の研究成果がまとまった頃、日本では物情騒然たるものがあつた。吉野作造らの黎明会結成（大正七年—一九一八）武者小路実篤らの新らしき村建設（同）、大原社会問題研究所設置（同八年—一九一九）、友愛会信友会等十五団体労働組合同盟会の結成（同九年—一九二〇）、日本社会主義同盟の創立（同）が相ついで衆目を見張らせる一方では大日本国粹会結成（同八年—一九一九）が對抗的に結成され、左右両陣営とも、その組織を鋭くしていた。海外ではドイツキール軍港の水兵蜂起（大正七年—一九一八）による革命への発展、ドイツ共産党の結成（同八年—一九一九）、中国では五・四運動が全国的に拡大（同）していた。

日本における小作争議は次表の通り、大正六年に高まっている。ストライキの波は大正八年に小作争議は大正十年に高まっているので、その間二年のズレがある。なお注1に見る件数と本表の違いは注1の但し書き参照。（表は青木恵一郎「日本農民運動史第三卷」日本評論社刊）

大正期農民闘争と都市労働者の争議数

	ストライキ件数	小作争議件数
大正三年	五〇	
同四年	六四	
同五年	一〇八	
同六年	三九八	八五
同七年	四一七	二五八
同八年	四九七	三二六
同九年	二八二	四六八
同一〇年	二四六	一、六八〇
同一一年	二五〇	一、五七八
同一二年	二六三	一、九一七

なお全国的な農民組合である日本農民組合が結成され創立されたのは鳴海町小作争議継続中の大正十一年（一九二二）四月九日であるが、その創立宣言は当時の農村、小作人の状況を知るために、重要な記録であろう。よって参考のためその創立宣言・主張を見ると、つぎの通りである。そうして同年秋「小作料の永久三割減」を要求、日本全国における小作争議の波が拡がるに至っている。

日本農民組合創立宣言

農は国の基であり、農民は国の宝である。日本は未だ農業国である。国民の七割は田園に居住し、またその七割は小作人である。然るに積年の陋弊は田園に満ち、土地の所有関係の悪風漸く現はれ、田園も遂に資本主義の侵略するところとなり、小作人は苦しみ、日雇人は歎く。茲に我等農民は、互助と友愛の精神を以て解放途上に立つ。

我等はあくまで暴力を否定す。我等は思想の自由と社会公益の大道にしたがひ、真理を愛し、妥協なき解放を期さねばならぬ。即ち我等は唯農民の団結による合理的生産を組合により、資本家に対抗するより外に道をもたないのである。

我等は急いではならぬ。土地の社会化も産業の目的も一瞬にしてなるものではない。春蒔く種は秋まで待たねばならぬ。既に国際労働會議は、農民組合の自由を保証した。我等はこの世界の大勢にしたがひ、倦むことなく歩みつけねばならぬ。

田園は光明が漲るまでには尚幾百回の苦難を通過せねばならぬ。苦難を知らざるものは成功を知らぬものである。

日本の農民よ、團結せよ！ 然して田園に、山林に、天与の自由を呼吸せよ！

我等は公義の支配する世界を創造せんが為に、此処に犠牲と熱愛をささげて窮乏せる農民の解放を期す。

主張

- 一、耕地の社会化 一、全国的農民組合の確立 一、農業日雇労働者最低賃銀保証 一、小作立法の確立 一、農業争議仲裁法の実施 一、普通選挙 一、治安警察法の改正小作人の生活安定 一、農業補習教育の完成 一、農民学校の普及 一、農村産業組合の完成 一、農村金融機関の確立 一、契約農業移民労働の廃止 一、農民住宅の改善 一、農村衛生の達成 一、農業保険の実施 一、農村婦人の向上 一、農民芸術の発達 一、理想的農村の設立 一、農民科学の確立 一、農民生活の享楽

そうして雉本の郷里鳴尾町（現名古屋市南区）と隣村鳴海町（現名古屋市緑区）では、大正六年から小作料（掟米）引下げ闘争が展開していた。これまで小作人は、不作期の減収については地主に個人的に泣訴し、懇願するのを例としていた。それは縦順を美德とし平穩無事が体質化していた時代だったといえよう。さらにその美德は主体性の喪失による、あなた委せの人間を形成せざるを得ないということであった。その小作人が組合を結成し組織的大衆行動に転じようとは、地主は予想することも出来なかった。これがさらに進展して地主側に対し永小作権を楯として理論的対抗するに至るのだが、この理論的武装の智恵袋こそ雉本であった。この理論が小作人の意識を高めて一つの力となった。このため争議は前代未聞といわれるほど長期化し、同時に大正初期の代表的農民運動となり、その團結と闘争について全国に知られ、また大正六年ごろから拡大した小作争議の先駆的形態となったのである。というのは日

本における近代的農民運動は、小作料減免を主要内容とする小作争議に始まるからである。これまでの紛糾・争議は、多くは地主の温情、小作人の譲歩で解決していた。小作人の反抗が団結した集団の共通意志となり、個々の農民の意志に代ったのであった。

小作人に明確な権利として小作権の概念を注入してくれた人間雉本は、小作人にとって百万の味方であり、地主側にとっては憎しみの対象となった。そうして後に雉本の銅像建立の発議と建立も、実はここに遡っている。

いま争議を委しく振り返ってみよう。争議の発端は大正六年（一九一七）、結実期の多雨による減収のため小作人が小作料（掟米）二割五分引を地主に要求したのに始まる。収穫は反当り平均五俵半（一俵＝四斗）と普通作七俵に比べ大減収であったが、地主側が主張した引下げ率は七分に止まった。小作人は、これを不満とし掟米不納戦術をとった。これが争議一年目であるが、地主小作双方とも、事は時間の経過とともに収まるという見方に立っていたがこれが予想を超えて長期化するに至った。その持続力の遠因として知識の普及も手伝っていた。大正六年（一九一七）ごろの世帯主の世代を、平均して四十歳台とすれば、その世代は一代前と違って新聞購読力があつた。これまでの無知は通用しなくなっていた。知識は力となり得ていた。ために全国的に拡がっていた労働者農民の要求への意欲を知っていた。かくていつしか闘いは二年目に入った。地主側では掟米が納入されぬため換金対象がなくなったこともあって、掟米支払請求訴訟を名古屋地裁に提起した。これを聞いた小作人は隣村鳴海町の小作人と合し、ここに鳴海町小作人組合を結成し、正面から闘争方式を採った。そのとき組合員三百八十人。それが要求貫徹まで要求割引以上の小作米不納を申し合わせた。^(注一〇)

この時点では、雉本はまだ争議と無関係であつた。もちろん郷里の争議発生については当然のことながら聞きもしまた鳴海町の地主層に知己もあつたことから知らされていたであろう。だが、なお学究の域に止まっていた。それど

ころか、将来この争議に係わり合うことなど夢想もしていなかったと言える。それは後述するように雉本が争議の進展の渦に入るきっかけを考えても明瞭であるが、当時の農村事情、人間関係、つまり農村共同体のワクに見る閉鎖性、土着的人間関係と小作争議の性格を見極めねば、雉本の歩み、それをめぐる評価について不十分な分析しか出来ないと考えられるので、この点についてしばらく筆を進めてみよう。

争議の発端の場合は前述の通り雉本の郷里鳴尾町であったが、小作人組合の名称が「鳴海町」小作人組合となっているのは隣接町村合同にまで組合組織が拡大したこと、鳴海町の小作人が多かったことによる。鳴海町はもと旧東海道五十三次の宿駅として発達した街道町だが、指定宿場のため町通りには宿屋と旅人相手の商家が並び、裏町は籠かき、人足などの労務者が住み、彼らが仕事の合間に二、三反の農地を耕作するだけの農地にも余裕があった。生産性の低い土地については地主に返還を申し出る農民もいた。ために地主は作男をおいて自作させるほどだった。それが明治二十五年（一八九二）から三十年（一八九七）にかけて人口増加し、地主に土地返還する小作もなくなり、地主は自作地を小作に出すようになった。一八一〇年代大正期に入り産業発展の波もあって、名古屋、熱田方面に通う労働者も急増し、加えて土地産業の鳴海絞も好況に転じていた。ただ農民の収入はこれに比例せず零細小作農の生活は貧困化し、農村の階級分化が進んだ。小作人の窮乏はひどいものだった。現在鳴尾町にある称念寺の住職は「そのころの小作人の生活はひどいもので副食は梅干一つだった。玄米食だったが、それは健康によいからといった悠長なものからでなく、掲げば量が減るからだった」と当時を思い返している位である。月収三十円もあれば生活は上の部の生活者だった。

そのころ鳴海町の全農家数は九八九戸。うち小作農は四九パーセント、（県平均二二パーセント）自小作三一パーセント（同四七パーセント）自作一九パーセント（同三一パーセント）で階層分化と土地所有の集中が著しい。ま

た土地所有については五町歩以上の大中地主は全体の三パーセント（県平均一パーセント）で土地集中は判然としていた。^(注2)

地力について見ると、もともと鳴海天白川沿いの農地は平年なら堆積肥料による地力付与があり多収獲田であったが、一たび風雨、日照りとなれば無収獲近くになる。こういう天変時には小作人は地主に願ひ出るのが習慣だったが、大正六年（一九一七）現在の歩引き要求の背景は米の再生産に必要な肥料購入費の経費要求も加っていた。当時の自、小作農民で現在鳴海西部土地区画整理組合長をしている近藤邦雄氏は「当時収獲は反当たり五俵半（普通作七俵）に下がった。七俵収獲時にも一俵は肥料代として回していたが、減収時も同量を使わねばならぬ。肥料は豆粕、ニシン粕だったがこの肥料代一俵を収獲から差引くと実収四俵半にすぎない。これでは生活不能、再生産不能となる。これが減額要求に発展した原因だった」と述懐している。はつきり言えばその原因は貧困ということにつきる。^(注1c)

それまで家族的温情主義主従関係から双方の関係が露骨に表面化するのはお隠されていたが、この生活と再生産不能という現実はこの関係を突き破ったのであった。そして地主側は小作人の要求を拒んだ。

三年目から争議は本格化した。小作人組合は組織を拡大し、鳴海、鳴尾町のほか隣村の本星崎（現在名古屋市南区）、大高（同緑区）に地域を拡大し、組合員六百人に達し、掟米二割五分引要求を主張し続け、要求貫徹まで納米しないことを申し合わせ、各地主を訪問して歩いた。個別交渉から進んで団体交渉的様相を呈してきた。この要求を容れる一部地主も現われた。それは小作人の氣勢を一段と昇揚させた。

これより先、大正七年（一九一八）二月、地主野村五郎ほか数名は、それぞれの小作人を相手に「掟米請求訴訟」を名古屋区裁に提訴していたが、このころになって地主側強硬派二十四名は小作人組合の対抗組織「尚農会」を結成訴訟に持ち込み一步も退かぬ態勢をとり、小作人六百五十名に対して「掟米催告並びに賃貸借契約解除通知書」を送

付した。(地主側弁護士は寒川清、服部経次)。これに対し小作側は全面反対の意志表示を認めた書を地主側に送った。この「異議の通知」代理人は名古屋市流川町の大野直人弁護士だった。かくて争議は組織対組織に拡大、最後に地主側は小作人の未納米六十一俵を抑え「大正八年度小作料を五日以内に納入せざる時は耕地明渡すべし」と土地返還の催告を行った。法律知識に欠けていた小作人はこの地主側の強硬態度に動揺した。法律運用に乏しい小作人の自信欠如が露呈し、中には「このまま穏便に」という敗北的感情が流れた。そうでなくとも農村に見る日和見主義が急に変化するものでもなかった。そうした人間感覚も闘いの中の人間胸底に流れていた。

昨日までは地主の家に小作料引下げ哀願に行くときは庭に入るに草履を脱いで土下座した身分であった。「地主の同情、小作人の忍従」で事は済んでいた。学歴においては地主側は中学(旧制)出が多かったのに小作人側は小学卒の最低学歴だった。こうした条件の下に長年つちかわれた意識が急に变化することは考えられぬことであった。穏便派の台頭も無理からぬものがあつた。争議中も小作人は個人的には地主と従前通り交際していた。それは生きのびる知恵ともいえよう。制度の威圧感が残存しているのに在来の習性が急に変わるものではない。急に両陣営間に断絶の線が引かれるのではなく、両陣営と各個人の動き、意識の変化は事の進展中に生ずるのが事実であろう。事態の急迫両陣営の対立激化を考慮するとき一時的な妥協は従来と違って徹底的な追い討ちになる怖れが多分にあつたのにもよる。極端に言えば食うか食われるかの正念場となつた。そこで小作人組合は「いかにすべきか」を協議した。その時「このままで敗北したら、どんな仕打ちにあらうか怖ろしい」との情勢判断が大勢の意見であつた。この「仕打ち」意識は、当時の天皇制官僚組織において派生した心理であつた。それは背水の陣へ向う心であつた。だが良い具体的な対策は浮かばない。小作労働には思考する時間などというものは、見出せなかつた時代に小作人が背負つた「時間不足」は、こんな場合にも現われたのである。いまでは、ただ実際的な法知識を与えてくれる人間を、味方を求めるだ

けであった。

このとき小作人代表格の一人、近藤庄吉の頭をかすめたのが雫本朗造であった。それは近藤庄吉は小さい時から雫本家に出入りしていたこと、娘が雫本博士宅で手伝をしており同時に雫本とは小学校の同窓だったからである。その雫本は、いま法学者として教壇に立っている。必ずや有効な手を教えてくれるに違いないと確信した。組合で諮り、直ちに近藤庄吉は京都の雫本家に赴き仲裁方を懇願した。これは雫本にとっては、全く予想外のことであった。それは地元の問題に口出することへの忌避感である。地主側尚農会会員には知人も多いこと、また土地定着性を属性として生きる農村には身分社会性質が強く残っており、地主对小作関係は土地賃借関係だけでなく個性、人格の作用が強いこと、従って閉鎖的社会であること、そうした日本農村の実情、地元の生活感情を知悉していた雫本は、すでに郷里を離れた他所者の立場に立っているわが身が、これに乗り出す場合、事によったら地主、小作双方で「いまさらながら」との拒否感をかもすのではないか、などと疑ったからであった。それで最初「自分には大学で研究することが残っている。大学を辞任すれば仲に立ってもよいが、弁護士でもないのに法廷には出れぬ」と断っている。だが小作人側に苦衷、生活を訴えられたため、ついに地主との「仲直り交渉」を引き受けた。足を簡単に運べば済むという位の気でいた。

時に大正八年（一九一九）も半ばを過ぎていた。しかも現実には小作人組合は加盟部落を拡大していた。かく氣勢あがり地主側に対し特別割引四―五割を要求するに至っていた。争議は正しく大規模化し関係田面積は五百町歩に広がっていた。

それでも雫本は交渉に自信を持って引受けた。というのは雫本は当時、大阪で主宰していた大日本法律研究所の活動によって関西で何回かの小作争議があったとき、農民が耕作権を勝ち取っていたことを知っていたからである。だ

が本人は「切羽つまった」と従兄方の雫本修平氏（当時鳴海小学校教諭）に心境を洩らしていた。深刻な苦悩の果てに断れぬ状況になっていたわけだが、地主側は自己陣営の弁護士に花井卓藏氏を選ぼうとしていた。もちろんこれは花井氏が民事訴訟にうまいというので断られていた。

雫本は事態を楽観していた。成果があった。それはさきの台湾土地調査のときの結果である。小作人に土地小作権を、地主にはその収獲の一部取得物権を認めたものであったからだ。土地に尽した小作人に農業生産の主体性を移すことが台湾で認められたという事実、それは当然日本でも認められるとの潜在感が強く支配していた。小作権所有は当然であるとの信念であり、一個のブルジョアデモクラートが自己の信念に従うにすぎぬと思っていた。謀反でもなかった。

この考えから雫本は地主側（一五六名）の一人で知己の当時町助役下郷百松氏を訪れた。百松氏は地主側の掟米訴訟に連名していなかったので、この点からも格好の人選と思い大正九年（一九二〇）四月十二日に訪問した。雫本は「小作問題に訴訟は面白くない。小作人側は自分に無条件に委任しているので地主側も委任して欲しい」と単刀直入に申し入れた。ついでに「もし委任して貰えないなら小作人側は永小作権を主張するだろう」と付け加えた。もし、このとき地主側が雫本と話を進めておれば争議は三年間で終っただろう。ところが下郷氏は交渉の場にその他の地主を一人も招かず、あとで他地主と協議した。そのとき地主側はこの仲裁話を小作組合の軟化と判断したのか「雫本に無条件委任できぬ」との強硬論に急変した。事は予想と丸反対の結果になった。そうして雫本は「永小作権」を楯として法廷で黒白をつけることに決めた。かくて争議は政治的様相を呈し長期化するに至った。

この雫本の態度硬化については別な見方もある。それは交渉に出かけた際「あの雫本なんか」と洩らした地主側の一言が雫本の胸を鋭く刺した、という点である。これは雫本の出生にまつわる件で、雫本が雲水某の子であること

を意味していた。これは雫本にとっては蔑言であり、人間をその誕生によって差別すること自体に地主側の驕りがあることに胸を焼かれる思いに沈んだ。かくて雫本は「それなら法律の力を借りより他ない」と決心した、とする見方である。これは十分に推量されることである。雫本にはこの一言こそは、自分を追いつめるいわれなき権力者の声と響いた。差別意識に対する論理性の対抗をとることに決めた。人間の一生は、こうした人間の偶然的言動で方向転換することがある。そしてこれが雫本の生涯の大転換点となった。雫本と血縁関係の永井荷風は世をすねていたが、雫本は堂々と法廷で決着をつける決意をした。この心には、幼いころ甘えを許さなかった祖母の教えが甦っている。

雫本は地主との話が不調に終わった四月十二日の夜、雫本家の菩提寺である鳴尾町西来寺で小作人集会を開いた。同寺を集会所としたのは「鳴尾町在の地主で同寺所在の地、鳴尾町に土地を所有しているものが少ないので無駄な衝突は避けられるからと判断したからだろう」とは地主の一人だった榊原清彦氏（元鳴海町内郵便局長）の考えだが、もと雫本家は同寺創立に深い関係があり、現在雫本の墓も同寺にある。付言すれば、同寺は真言宗大谷派に属し檀家には地主、自作、小作が含まれていたが、先に代住職小原真昭氏のころ、同寺には真宗の傑物といわれ、本山に対抗して破門されかかっていた伊藤証言師が時に来訪し原始仏教を講じていた。その師には晩年の河上肇が私淑したといわれる。この本山から異端視された師が来訪した寺で反地主農民集会が開かれたのも歴史の皮肉な因縁であった。

雫本は集会に本堂使用を避け、境内では他の出入りを禁止、篝火をたいた。燃えさかる篝火を背に雫本は集合した小作人代表を中心とする五、六十名の農民を前に「小作人には永小作権がある」と力説した。ワラジばきにつきはぎだらけの農作業姿の農民を前にして説く雫本の姿は戦いの前兆でもあった。この一言は小作人にとっては万言に勝る味方であった。闘うための理論的武装が与えられたからである。このころから博士は小作人と同一体となった。身分制、学歴社会の強い時代に土地柄にも拘わらず、こうした両者の感情同一化、その精神的結びつきが凝固してきた。

雉本は同時に「暴力は絶対に用いず法廷で闘え。年貢は一カ所に集め、そのあと地主と交渉したがよい。耕地返還を求められたら耕作権を貰え。年貢を売却し裁判費用に回すことも計算したがよい」との戦術をも指示した。さらに教え子である大野、亀井、池田三弁護士を小作人側に紹介するの労をとった。いわゆる百姓一撥とは全く別の闘争形態であった。

雉本の理論は先述した在外研究中に学んだドイツ法によったもので、半封建的な地主的土地所有と対立するものであったが、それはブルジョアデモクラシーの範囲内での論理に止まっていた。あくまでも農民主体の農業再生産の解放を考慮していたから、この理論が構築されたもので、ここに雉本の現実把握、解釈に対する新感覚があった。

それが地主側にとっては「共産主義的の演説」（尚農会「鳴海掟米問題」）と響き、私有財産否定と受けとめられ雉本は謀反人と決めつけられた。天皇制地主国家における個人の人格限界が存在していた。思想を抜きにして、ただ自己陣営に不利な人間を共産主義＝悪とする思考パターンが、ここにもあった。天皇制絶対主義の農村版、地主国家思想の発現形態、意識があった。これこそ明治三十年代に成立したブルジョアと封建勢力の完成形態とブルジョア自由主義の対立であった。もっと深く考えるなら、思想的には自由主義を唱え、平等を主張した明治政府がブルジョア民主主義さえ放棄した半封建性に対する抗争の一発現形態であったといえよう。

さて西来寺集会まで争議の将来について一抹の不安に駆られていた小作人側は雉本によって地主側と闘う法的根拠を明示され視角を拡大した。それは農民共通の利害が鮮明になった結果だった。法理で武装されて足が地につき目的意識が浸透した。そうして代理人大野弁護士と雉本から照会された弁護士四名を代理人とし掟米を「永小作料」としての請求なればとも角、賃借料としては請求に応ずることは出来ぬ」と主張し「永小作権存在、確認並ニ登記ノ仮登記申請」の反訴を提起、同七月「永小作権ノ仮登記申請」を名古屋市裁に提出した。争議はいよいよ長期的様相を濃く

した。

双方引くに引かれぬ形となったがそれでも雫本には成算があった。それは先述した台湾土地調査結果による小作権が植民地で認められたから、日本でも当然認められるという信念によっていた。だがその発想も鳴海町の現地状況の場では他国の法律にすぎなかった。雫本は小作人を無視した処理は誤まりであり、掟米小作権とは江戸旧幕時代からの慣行で、永代有続すべき実権であり、これは民法施行にいう永小作権である、という論理であった。謀反どころかブルジョアデモクラートが自己の学問的良心に従う自己内在的なものの発露であり、小作人にとっては運動の父であり救世主と映った。雫本の主宰する大日本法律研究所と京都の住宅には、小作人側の伝達役が経過を逐一報告しに行った。同時に指導も受けた。

その伝達方法は電話とか車とかではなかった。資金のない小作人は鈍行汽車によったが旅館などで泊ることは一回もなく、最低費用で往復し、雪降りの日もマントの下はうすいシャツ一枚という状況だった。鳴海の街道筋に作った小作人組合本部の備品といえば自転車一台、会計簿と、この連絡時用のマント二着という貧相なものであった。

地主と農民の物の考え方、立場の差の鮮明度は、いよいよ判然としてきた。それは現実的立場における生産と消費、労働と分配が明治以来、どうなってきたかの問題であった。つまり明治維新がブルジョアデモクラシーの獲得にならず、封建地主政府保護の下に成長せざるを得なかったことの反映であった。土地所有の自己実現形態が小作米に現象していたこと、それは農民の肩に重かったということである。同時に農村支配は、この土地所有と小作米さらに租税によって地主側に容易であったという行政につながっていた。「一般には大正一〇年代の日本は、資本主義の爛熟期にあり、他の大部分の地主にはむしろ「住みよき国」であった。いつものことながら政治権力とうまく結びつきその支配権力を傘にきて、おおむね小作人など人間とおもわず、奴隷の如く虐待し、そのうえ高い小作料を、さら

に攻妙に搾りとるひとつの手だてとなったものが、ほかならぬ、かれらのいわゆる「温情主義」であった。」(前掲「日本農民運動史」第三巻二〇一頁)という抜きさしならぬ内実が厳存していた。

このような現実的背景、それが永小作権の権利取得、学問の大衆性とからみ合って、闘いが進んだところにこそ、この争議の特殊な形態があった。これは雫本に見る問題把握の実践性であった。社会における諸種の変化を雫本は純粹思惟の領域で眺めなかった。善良なヒューマニスト有島武郎は自己所有の農地を小作人に分与した。土地のない雫本は小作権という法権利を与えた。この雫本の態度は地主側にとっては自己陣営支配に対する全面否定であった。明治憲法の抹消であり翻天覆地の急進論と映じた。雫本派と目される者には憎悪の矢が放たれた。雫本の従兄で当時鳴海町小学校教諭をしていた雫本修造氏が名古屋市内の呼続小学校に転じたのも、同教諭がただ雫本の親類だから、という単純な理由によったものだと思われている。教育行政における地主的官僚支配の機構運用の現われといえるであろう。それは正しく日本歴史の重い歩みの足どりの一つであった。歴史の連続性の中の一時点における個人の運命であった。

五

かかる歴史的背景の中に生を送り、いま地主闘争の支柱を得た小作人組合は組織を一致と強化した。「字」^{アザ}ごとに組を置き、ついで一年交代輪番制の惣代を決め、その上部を大惣代・つまり争議専従者とし数人伍して地主を訪問し、交渉した。大惣代、惣代の農作業は全員で手伝うことにした。大惣代は月に少なくとも二、三回は大日本法律研究所と京都に雫本を訪問し、和解条件、闘争方針について教えを乞うた。雫本は無償でこれに応じていた。それまでは国立大学の教授という肩書は小作人にとっては別世界の人であった。それがいま、小作人の生活に直接結びつくこ

とに身を乗り出し、いつでも相談に乗ってくれる。これが小作人が雉本を人間的に信じ、自分たちを同一世界の住人と考え得るに至ったのであった。自己陣営の利害代弁の人と見たのである。両者の間は、この相談の回数ごとに精神の交流へ感情の昂揚が深く高くなって行った。争議は長期化する一方であった。ドイツ農民戦争と違い、農民運動に先立つ宗教改革はなく、またミュンツァー的人物はいなかった。しかし小作人組合の結心については強固なものがあつた。軟化する者もなかった。その中心は雉本の頭脳にあつた。ただ小作人側に好意をよせている地主がいた。それは大地主の千代倉（酒醸造を創めたことから千代倉と称した。その苗の徳米の年収は約五千俵といわれた）下郷次郎八氏であつた。関係全農地の二五パーセントに当る一九四町歩の土地に水田のみ。他に畑、山林は含まずを所有（全国的大地主の本間家の最高面積は昭和十年に一九三五一、八四一町歩、庄内平野の大滝家は一八〇町歩）していた千代倉家は、最初から中間派であり、小作人に対する地主の土地返還要求に連名していなかった。また苛酷な条件を強いていなかった。「千代倉は善政政策をとってくれた」といまなお言われているのは、こうした態度から出ている。しかし、これは大地主だったため直接的な人間支配をとる必要がなく、対小作人交渉は中間的存在ともいえた使用人に当らせていたことにも起因するだろう。つまり中間管理層がクッションの役割を果たしたのではないか。それと小作人労働力安定と安価の常時雇用に対する不安、また商業ないし産業資本家への転化の可能性も潜在していたのではないか、との想像も成り立つ。

争議は長期化し小作人組合加盟者の納入率は掟米額の六割程度となっていた。大正九年（一九二〇）に至り地主側は争議対象地区の耕地整理を計画した。小作人側はこれを阻止した。地主側は近在の町、知多郡大府町（現在大府市）の土建業者加古組の親分加古庄太郎^{（注3）}に小作人の阻止排除を依頼した。同年五月三日同組員四十三名はドスで小作人を追い出し、第一期工事二〇町歩を完了させた。このドスで脅すということは、いわゆる俠客的人間が、何らかの

負目を持ち、それを包むための自己防衛心理であろう。しかし俠客がサディストに急変したときには、無意識の中に自分の加害者意識は、このサディスト的優越感の中に解消し自分の行為を正当視するもので、ここに地主のために、いわば買われる要因が潜んでいたのだろう。この耕地整理事業は県農務課の山北技師の計画によるものであったが、水田は小作人の作業と暴力団風の人間との抗争が激しく交叉して修羅場化した感があった。農地を取り上げられた小作人は名古屋南部の工場地帯に勤めて生活費を補填したり、別小作人の水田を分割作業してしのいだ。一方、地主の中には農耕を放棄する者も出た。雉本は「法律で闘う」初志が容易に達せられないのに頭を痛めた。

大正十一年（一九二二）、争議は高揚した。小作人はついに埒米八割五分引を要求した。なお、全国的に見れば、このころの「小作料と地価の下落傾向は小作争議の盛んな土地ほど甚だしいことは言うまでもない。だから地主の土地売り逃げと小作地の転売や自作化が、この期間（注、大正六年以降）に目立って多くなっている」（稲岡「日本農民運動史」青木文庫一〇二頁）のを見ると、これは鳴海だけの特殊状況とはいえないだろう。この小作人の攻勢の背後に雉本の差金があると目した地主側は、貴族員議員坂本鈺之助氏を訪ね援助方を懇請した。坂本議員は同年高橋内閣一月国会で雉本攻撃の弾劾し「地主と小作人の親子のような親しい間柄は踏みにじられ……地主は全く窮乏生活に陥る有様である。……某大教授などは小作人側に声援を与え地主側を困らせている。……官吏でありながら小作争議を煽動したからには当然餓首すべきだ」と質問の矢を放った。地主側には雉本の存在がなければ争議は収拾すると見ていた。争議と雉本は一体化して憎悪の対象となっていた。正と邪は合理と非合理、歴史と非歴史のカテゴリーで判断されなかった。この動きの中に、実は当時における戦前の思想の貧困があった。地主対小作人は恩恵をほどこす側と、それを受ける側の両端に図式化された様態であった。

この坂本議員は雉本の本家永井家を継いだ永井松右エ門の方であるから雉本と親類筋にあった。だから国会を舞台

として地主的官僚農政をめぐり肉親同士が相争う状況となった。同時に鳴海小作争議は一きわ全国的な視聴を集めるに至った。

思想、その実践に生きようとした雫本に攻撃の矢は続いた。学園の上司、友人からも雫本に対し一實際問題にまで関与すべきではない」との勧告もあった。これは憎悪からでなく友情からの発言であった。それも、小作人組合員の一部が夜間、地主の家に押しよせ、樟木のような木で、門を破壊するなどの行為もあった、という風聞も伝わったからであった。「暴力に訴えるな」と訓していた雫本は暗い心に沈んだ。反抗につきまとう付加雷同姓といえ、それまでながら、この群衆的心理のあるところ、争議から手を引きたくもなかったろう。この忠告は或いは弾劾質問よりも雫本の耳には強く響いたのではなかったろうか。世の常の市民的平和な生活を送るには、かかる狂乱の渦から脱れたがよいことに気がつかぬ雫本ではない。自分には妻も子もある。職場もある。さりとて研究成果の永小作権が認められないのでは、学問的良心が許さない、という矛盾に心を痛めつけられた。その苦しみを受け、乗り越えるのは、ただデモクラシー信奉だけであった。

その間に地主側にも生活難があった。先行き不安の影がつきまっていた。その一つの現われに地主、中村重太郎の「土地返還伺書」^(注4)がある。農商務大臣荒井賢太郎宛の「所有地の政府寄附」を内容とするもので、農地を相当額で買い上げて欲しいという前代未聞ともいべき主旨であり、農村経営の危機の表示であった。これも不用な、つまり生産を伴わない土地に対しては地主は必要以上の土地を現金に換え、これを資本にして何らかの経営に移行しようとする計画があつてのことであり、また政府の自作農維持方策の表明でもあったと見ることも許されるだろう。

この農村危機は、地域的には小作争議を主因としながらも、金融恐慌に包まれていた日本経済と表裏相対していたものといえよう。

つまり日本経済の構造的特質が顕化したものといえるだろう。「日本資本主義の特質として、これに半隷農制的軍事的性質の特徴を付与するものは、正に、軍事的産業機構の必至的建設の基礎としての日本農村の広汎な半隷農制的零細農耕Ⅱ高額物納地代徴収の地盤を全面的に維持、再来し来った、その「植民地近似的」収取の諸形態に、明示され……かかる日本農村経済の構造的特質の基礎規定は、即ち、この解体に外ならぬところの、農村クリーゼの基礎諸要因とその特徴的形態を決定する。……日本農業クリーゼは、爾後、大正八年（一九一九）に至る半隷農制的金融資本の本格的確立過程に於て……クリーゼとしての自己を決定的に定立せしめた。」（岩波「日本資本主義発達史講座」第三部、農村経済と農業恐慌「相川春喜」ということである。それは「一面からみれば、一八四八年のプロシヤ或いは一八六一年のロシアにおいて、封建的Ⅱ隷農的義務（賦役）が、土地の私有の法認に対する賠償として、償却金或いは税金Ⅱ雇役という……關係に、本質的には完全に等しかつた」のだし「半農奴制的性質を鞏固化し、拡大し、深刻化する道を辿つた。」（前同第二節「農業に於ける資本主義の発達」山田勝太郎）

この危機は日本経済を覆い、大正九年（一九二〇）三月に株式、期米、綿糸、生糸など証券、商品市場が大暴落、いずれも六ヶ月間に半値以下に惨落し、銀行取付け騒ぎが各地に発生していた。

かかる推移の中にも争議には妥協策が出始めていた。それは中間派の千代倉家による妥協案であったが、そこに不可測の事態が生じた。

大正十三年（一九二四）春まだ浅き三月十三日の夜、雉本は温泉治療先別府からの帰途、明石沖で乗船宮崎丸から消えた。小作争議に曙光がのぞき始めていた折も折である。争議にみた雉本の凄まじい熱意と、その先駆的頭脳は瀬戸内海の波に吞まれた。その不慮の死をめぐり自他殺両論が渦巻いた。しかし何分にも霧の夜の出来事でどちらとも推測の域を出なかった。自殺説として、雉本が非難の渦中に立ち進退きわまり、神経衰弱が昂じた結果だ、としたの

は地主側の見解であった。小作人側にあった近藤邦雄氏は「死去の入電のとき、小作人組合では会議中であり、一同は死去の報を受け会議は惨胆たる場面となった。一方、地主側は勝関の大声をあげ各戸に国旗を掲げた位であった」と当時の情景を振り返っている。

他殺説として「霧の中で殺し屋の手口にかかって海に投げられたのだ」としたのは小作人側に多かった。それは俠客を使うなどの対抗手段に出た地主側に対する一つの見地であった。学友関係では「上司、友人からの勧告を苦にして自殺されたのでは……」（一九七〇年一〇号「法学セミナー」座談会）との見方がある。また地主側の見解として単的なのは「人の為にならぬことをしたので行き詰った」と判断した人もいた、とは名古屋郷土文化会の一理事の話である。この感覚は「秀才の独走、世間知らずの空論者の末路」といった含みが感じられる。納得の行かぬことを認めない、とする雫本の言動には学者的自負心もあり、それが地主側に分ってもらえないもどかしさが残存していただろう。しかし地主側には、それは雫本の愚直さとして映っていたと言えるだろう。雫本の三男国雄氏（現在東大阪在住）は、当時を振り返って「当時二歳だったのでよく憶えていない。夜中、吐気を催し甲板に上ったようです。吐いたとき誤って海中に転落したようにも聞いている」と述べている。実際、家族同伴で船中にあった雫本が簡単に自殺を考えるとと思えない。だが別府温泉における治療中にも展開困難の争議が壁に突き当たったように動かぬこと、予想外の地主・地主国家権力と攻防の熾烈が重層となり頭を去来していたのは否めない。またその悩みから精神的な重圧がのしかかっていたことも推測される。人間は所詮、自分が権力側ないしは、体制に近い生活の場にある時にはその権力行使が相手に与える力をさほど感じないが、逆な場合に始めて自己に置き換えて考えるということであろうか。そうした時の苦悩について考えると、秀才コースを歩いた雫本が、本当の挫折を味ったのはこの苦盃ではなかったろうか。指導者の心底は深く広いにしても、それに従う衆は、ただよい結果を待望する。それに雫本は「自分は大衆の

ためにある」などと傲慢に自己規定する人間でもなかった。だが小作人「民衆が自分を支持しているとの確信は持続していたであろう。というのは苦悩しつつも小作人の相談に応じていたからである。

いずれにしても、それは一学者の死に現われた日本の歴史、天皇制官僚的農政の現実であった。つまり「雉本の主張が半封建的な地主的土地所有と真向から対立するものであった……前近代性の強く支配する日本社会が（雉本にとって）住みにくかったことも事実であろう。だからといって雉本の死を明石沖における絶望の果ての結果と見るのは誤まりであろう。……彼が権力によって与えられた不愉快な事件（坂本議員の演説）で、自己の学説の正当さを貫くのを断念するようなものであったとは考えられない」（昭和四九年六月、法学セミナー増刊号「日本の法学者」二〇三頁）とし「そうしたすぐれたブルジョア学者が自由に生きれなかった戦前の日本社会、日本国家は実に恐るべきものであった」（同）との感想、思考がある。とするなら前近代性の支配する日本社会ではデモクラートの存在は邪魔であった。他殺でないにしてもデモクラートに生き難い歴史的現実の社会は日本であったのである。雉本は歴史的悲憤に燃え、その炎中で焼かれたといえよう。それどころか、運動の展開が深刻化するにつれ、雉本の心中には生死の垣根がなくなっていたとも思料されてくる。しかも死をめぐる推測は小作爭議の深刻性人間関係を浮き彫りにした。

当時の新聞報道を調べると大正十一年（一九二二）三月十五日付大阪朝日新聞は「雉本博士明石沖で投身、全家族と別府温泉からの帰途」と見出しをつけ詳報、同じく名古屋新聞は「京大の雉本博士宮崎丸から行方不明、原因は突然の精神異常か」と題し報知した。さらに大阪朝日新聞は後報として「迷児の小作人―雉本博士の死―と題し解説した。それは……

「死によって光を失い将来の方向に迷うのは小作人であろう。博士は頻発する小作問題を憂慮して小作人の中に入り味方した。爾来三年小作人の耕地は永小作権ありとして小作権承認の訴法を起した。また現在の小作料は高すぎる

といって小作人を指導し地主に対抗した。それで小作人は博士を神の如く敬慕し、博士の指導を遵守し実に三カ年克く地主と戦った。然るに今回の死によって小作人の期待は茲に春の露の如く淡く消え行くほかない。……小作人は波に弄ばれる小船よりも脆く負戦に終る他ない。死んで行く博士もこのためには浮かばれまい」……

ともあれ博士の死亡時の大正十一年（一九二二）には日本農民組合が「小作料の永久三割減一の要求を掲げ、そのあと日本全国にまたがる小作争議が発生している。すでに小作料減免要求は全国農民の声に拡大していたのである。それを背後に聞きながら博士は海に身を投げた。また日本農業、同時に自小作農民を救う道は、もう単に小手先だけの要求だけでは解決できぬ矛盾を抱えていた。それを頭に浮かべ日本農業の根本にまで遡って考え、一種の絶望感にさいなまされていたかも知れない。この悲劇は人間、社会、歴史の進歩は個人の悲劇が連なるところに生まれる具体例でもあろうか。

雫本が死んだ前年には、日本で自作農制定法が実施された。だが、それでも日本農業の抱えた矛盾は解消されなかった。日本農業はまだまだ苦しい道を歩かねばならなかったのである。その矛盾点を博士は十分承知しながら、生を終えたのではないだろうか。では一体、何が雫本博士を、争議に介入させたのであろうか。それを解く一つの鍵といったものがある。

それは博士が人間の深層心理に深い関心をよせていた事実である。これは博士の死後遺族によって発見されたメモから覗かれる。メモは在独中に書かれたのか、帰国後のそれかはつまびらかでないが、四十九頁にぎっしり詰めて書かれている。頁をめくるとまずフランスの神経病学者 Charot Jean Martin (1825-93) についての感想が走り書かれており、自我、超我に抑圧された神経のあり方にふれている。また Freud, Sigmund (1856-1939) も取り上げ暗示と流行（優勝模倣）に思いを至した文字がある。さらに民族心理、天才、能才、選良について感想を認めているほ

此二名均係四川巴中縣人氏也
一係四川分佈，其一係米山月雲
一係江蘇人氏。

四 天才と精神病者

, microdata 1859 1864

· 燃點心花之外 - 精神疾病

27524512, Lombroso

47 (New Student price)

12-7-72 7:15 — " "

7. 8. Entering, - 723. 702
8. 0. 12. 14. 12.

2. $S'_{10} = \{1, 2, \dots, 10\}$ に対して

Padova, Borio - Limbro

$$E_v = 3 \text{ J}$$
[illegible]

3. Wuk 天木 已3 保飽的

1-340117-22 22/12/2017

か社会化、人格化の問題にふれた個所では Ratzenhofer, Gustav (1842-1904) を引用し個人の生命的社会的心理的な方としての「関心」概念を説明している。このほか Otto, Ammon (1842-1916) の人類的社会学への創見に心引かれているのは、社会化と文化発展への関心が並にならぬことを物語っている。

そうして「いかにして発展を近代化するか」への道を迎ろうとしている個所もあるが、最も目を引くのは「群衆は選良なり」と書き留めている個所である。ここにこそ小作争議に係わる博士の心理を開く扉が見えてくるようである。それは学問と実践の問題、保守と進歩と、その発展への主体への考究であり、この心こそ農民Ⅱ大衆Ⅱ選良の図式となり、博士の争議介入の心的動因がのみこめてくる。この点に言及したメモには「特定の社会的感覚及び理性的発達」と書かれ、ついで「源泉は選良なりとす」と断じている。近代的自我の形成と模索が見られる。また「生活力弱まれば精神力は強大となる」とアンダーラインを印して書き認めているところもある。

このメモに見る限りは雫本は人間の才能と精神異状にメスを入れていたこと、また精神力の価値を高く評価したことで、そして発展の源泉として民衆を取り上げていることが理解され得る。だから、簡単に自殺するとは考えられない。ただ Lombroso, Cesare (1839-1909) にふれた個所には天才と精神病にもふれているが、それは天才と精神病が紙一重の差であることの是認と受けとめられる。それが現実の錯誤に当って、かつてメモしたものと重複し、言いようもない屈折した心境になったのであろうか。また学問、真理へのあくことない追及と、官僚制社会、人間との二重性人格を味って、その間の否定できない断層に煮湯をのむ思いをしたのかも知れないが、メモに見る限り民衆を信じ、そこに社会の源を見出したということは疑い得ない。かくて雫本は人間を信ずる基盤を所有していたことも証されるものの、それ故に、その感覚に対し反論する者への怒りも生じ、それが身をさいなませ屈折した心となり、一種の虚脱状態になって甲板に上っていたとも推測されてくる。もしそれによる投身ならば、そこに意識せざる生命の昇

華にも似た心があったろう。教養を身につけたリーダーにとっては、自己行為の結果が、どうあろうと、それに加えられる評価は良否いずれにせよ、名誉であろう。それこそ歴史に名を止める、などという俗欲とは無縁の自己充足心、現実と対決した自立の存在証明への茨道であった。

六

雫本の死を契機としたかのように地主、小作人間に和解機運が台頭し、大正十二年（一九二三）三月九日、名古屋区裁判所深井判事の仲裁案提示によって完全和解となった。調停内容には小作権所有の成文はなかったが、小作人の鍬先権として明記された。これは小作権と同質と見なされるもので、この案の骨子は実は雫本の草案によるといわれている。^{（注5）}ここに六カ年に亘った小作争議は大団円を迎えたのであった。

調停時、小作人組合の積立金残高は約七千円であった。組合では、「自他殺いずれにせよ犠牲者であったことは事実だ」と悲しみ雫本の思義に報い、功を讃えるため、この残金で雫本朗造銅像建立を決めた。小作人相はかり死亡時に大惣代であった青山由太郎を建設委員長に選任、委員に近藤邦雄ほか四十六名の小作人がその労に当ることになった。委員の近藤邦雄は全国の銅像を見回って日本最高の銅像建立を目論んだ。そうして、大正十三年（一九二四）五月、原型師の京都市立美術学校の国安稻香教授に原型を依頼、発注先を京都市寺町通りの高橋才治郎宛に決めた。建立地は雫本の郷土の石堀山に予定した。この山は雫本が少年時代、日課の如く散策した。いわば故人ゆかりの最適地だった。像は大正十三年（一九二四）十月完成した。厚さ平均九ミリ、重量は実に三〇八トン。精気あふれんばかりの雫本の相を最もリアルに写した像であった。即刻、組合では銅像建立認可願を愛知県知事（当時岡正雄）に提出した。像はすぐにも石堀山に立つ筈であった。

ところが争議中の人間対立感情はなお強く残っていた。地主側の急進派は「忘れかけた思いを呼び起す心配がある」との奇妙な理由から建立に異議をはさんだ。建立許可願はいつまでも捨ておかれた。農村共同体の中の密室的差別性憎蔑観は棺に納った人間にも遠慮なくつきささった。これで建立は先に伸びた。

これより先、地主、小作人組合双方では仲裁を機に融和機関として協調体「共和会」の組織を作っていたが、それは形だけであり、なお誕生間際の弱さがあったのは否定できず、内実では身分制的感覚が残存していた。

すでに銅像は建設委員会が受領していた。その像が建立されずに宙に浮いた形になった。止むを得ず銅像を地元の西来寺境内に運んだ。かつて農民に小作権を説いた地に雉本は故人となり銅像となって着いた。それも、いわば招かざる像にすぎなかった。荷造りされたまま寺内で横たわった。

それから五年、昭和三年（一九二八）二月、建設委員会では再度建設認可願を県に提出した。翌四年建立は認可された。奇怪なことは、その歳月の間に銅像は誰かの手で寺から秘かに運び出され、寺から約四キロ離れた大変町内の県道大浜街道の、とある小間物店の隅に放置されていた。認可は下りたが、現物がなくなっていた。正に死人に鞭が打たれていたのである。この鞭は、いわば近親憎悪感情がむき出しになっていたからであろう。「同郷から出た叛逆者は始末せよ」といった狭い人間観、土着的人間関係の底流が去っていなかったからであろう。これは他面、博士がもし、他郷出身者であったなら、小作組合側も一步の間隔をおいていただろう、とも想定できる。ともに、人間連帯を、地縁に求めたため、憎愛がくつきりしていたとも見なされる。

建設委員会では、かかる仕打ちを見て急ぎ建立工事に着手した結果、昭和五年（一九三〇）四月二十七日、石堀山で除幕式挙行の運びとなった。この急ピッチの工事は、小作人が手弁当で毎日数十名無償奉仕した結果であった。雉本はいま銅像に身を変えて、かつて愛した山上から伊勢湾を眺め、眼下の田で汗する農民の姿を見ることになった。

除幕式には、まだ元気だった二男秀雄、長女みどり、三男国雄をつれた浪江未亡人が挙列した。農民六百余名の赤心は、ここに成った。小作人全員が式に参加した。樺の太木、桜の木に囲まれた山の銅像の下に農民は年一回集まって祭礼を催すことにした。その費用は毎月一人当り一合の米を拠出して当てることにした。

石堀山上の銅像は以後十五年間、世の風雪を眺めていた。戦争中の金属回収による銅像買取りは、雫本の銅像は重すぎて運搬費で食われすぎるといので回収を免れた。そして敗戦。混乱のあと朝鮮動乱を契機として景気循環過程に入った日本経済はそれから間もなく高度経済成長期に入り、未開発の地はブルドーザーが入ってきた。石堀山周辺もその例外ではなかった。緑土はけずられ、赤土は醜く、まるで大地の臓腑を出したように流れ出した。銅像は、この開発の前に転居を強いられるに至った。

このとき小作争議期の闘士が移転先について奔走した。かつては争議地であった田は、戦後の農地改革により小作人の所有になっていた。その土地は、鳴海町、西部土地区画整理組合によって区画整理が進められて来た。その組合運営の主体こそ当時の農民であった。そこで区画整理組合では同区画内に小公園（西脇公園）を作り、その一角に銅像を移転することを企画した。その場所は争議時に倍に「西田」^{セイデン}と称された約百町歩の土地であった。しかも、この地こそ小作争議の中心地帯であった。そこは既に埋め立てられ周囲には住宅が建ち、舗道が走っている。その田圃だった地六千坪を小公園として銅像移転先とした。さらに設置場所を「雫本博士記念公園」と命名、昭和四十八年十一月、石堀山からこの地に銅像を移した。その土台石は大地震にも耐えられるよう設計されていた。

雫本が明石沖に姿を消してから三十八年。風雪にさらされた像は、かくて、いま冥福すべき地を得た。

四十六年の人生を歴史錯誤、人間の運命という渦巻く歴史の流れの中に置いた一人の人間を、この完成建立された像、腰を据えて毅然として立つ人物を仰ぐとき、純粹すぎるほど自分を全うした人間を見る思いがする。

雉本は銅像として立っている。人もし、この像の前に住み、故人に人間の道を問うならば、雉本は生けるが如く、唇をふるわしてこれに応ずるかのようである。それほど真に迫った像が、いま安住の地に立っているのである。

ところがさらに同公園を市に寄附する時期についても論議されている。それは、いま同公園を管理しているのは往年の闘士であり、農民だが、その人々はいまはすでに老境に入っている。いまの若者に当時の生々しい生き方、闘い方を知ってるのは少ない。だからもし現管理人が、その仕事を続けられなくなれば、おそらく公園は省みられなくなり、荒れ果てるだろうし、引いては雉本の銅像も捨て置かれるだろう、という危惧の念である。だから、適当な折に名古屋市に寄附すれば、市の管理対象となり、最小の管理は続けられるだろうとの希望があるからである。

雉本の霊は、こうした動きを、どう感じているだろうか。実社会においては「棺を蓋いて事定まる」の伝えも、人物評価の歴史的條件が変わり定着しない限りは、当てはまらない、と冷厳な見方をしているかも知れない。また民衆と源泉と見ていた雉本は、自分を敬仰してくれる人に対しても、かつてのエネルギーを、世の為に使ってほしいと願っているかも知れない。人間が存在する限り諸問題が生起する。だが、それが解決した場合でも、それで問題を機械的に区切って事を済ますなら、文化の継承も疑わしくなる。敗戦後三十五年近い歳月の間に俗論はびこりいつしか今日の利益に狂奔して未来を考えない一群の姿に、風雪にさらされ、個と社会の矛盾に悩み、俗慾とか名譽心を投げうった人間の碑は「知的怠慢は許せない。疑問は追及せよ。正しい知識を学び発言する勇氣をもて」と激励しているかの様である。これは、雉本の生涯を通じて自から導き出される言葉ではないか。それに対応する人間の生き様が雉本朗造の霊を生かすか殺すかを決めることになる。

(注1—A)

小作争議・小作人組合・地主組合・協調組合数および組合員数(大正六―昭和一六年)

争議件数	小作人組合 組合員(千人)	地主組合 組合員(千人)	協調組合
大正六年	八五		
七年	二五		
八年	三六		
九年	四八		
十年	一六〇	六一	八五
十一年	一五七	一一四	一七六
十二年	一九七	一五〇	三四七
十三年	一五三	二、三七	五四三
十四年	二、〇六	三、四九六	一、三七一
十五年	二、七五	三、九二六	一、四九一
昭和二年	二、〇五三	四、五八二	一、七〇三
三年	一、八六六	四、三三三	一、九〇九
四年	二、四四四	四、一五六	一、九八九
五年	二、四七八	四、二〇八	一、八八〇
六年	三、四一九	四、四二四	二、〇四七
七年	三、四四四	四、六五〇	二、〇九八
八年	四、〇〇〇	四、八一〇	二、三〇九
九年	五、八二八	四、三九〇	二、二一九

年次	所有面積	総数	五反未満	五反以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上	五十町以上
明治四十三年	四、九三三、三九〇戸	二、三四〇、二三戸	一、二六六、八九一戸	八〇、八七戸	二七三、三〇九戸	二七、九七戸	四一、三六戸	二、八九九戸	

愛知県下小作争議件数

区分	大正八年	大正十年	昭和二年
愛知県	二〇	一四	七
愛知郡	二	三	五

愛知県史第三卷 四八三頁

注：ドーアの表に大正九年まで組合はないが、こたは日本農民組合創立前であること、小作人組合はまだ地域的であったこと、従って鳴海の小作組合も算入されず争議件数の中に組み入れているものと思われる。

(注1-B)

耕地所有者戸数（地主）

資料：R・P・ドーア「日本の農地改革」四三頁

(注1—C)

注1—Bに見る通り、大正三年と八年の間に、五十町歩以上の大地主は約一千戸、十町歩以上の地主は約四千五百戸の増加を見せている。その反面、三町歩以上は約二万七千戸、五町歩以上は約五百戸、五反以上の者は約七千戸が減少している。

これに対して、五反未満の者は常に増加の傾向を示している。この事實は、日本において零細農経営が絶対増を見せていることを証明すると同時に、大正十年以後になると、資本主義の一般的な危機のために生じた農村恐慌によって、三町五町

十町五十町以上の各地主戸数が減少しており、その没落の状況をはっきりと物語っているのである。

この間に、三町から十町の地主数が減じて、一町以上三町未満の地主が増加しているのは、中小地主が地価の値上がりを好機にして、自分の生活を維持するに足るだけの土地を残してそれ以上の部分を現金に換え、これを資本にして小商業や小商売に投資しようとした事実を物語っているが、一方では政府が中心政策にした自作農程度のものを維持しようとする方針を具体的な表われと見ることが出来る。

二町以上の耕作面積のもつ農家戸数が、大正八年までは増加したが、——やがて拡大されてゆく農業恐慌のために——少しずつ減少する傾向を見せ、五反未満は、明治四十三年までの間に限界点に達しており、五反以上一町未満の増加は、このワタの中で貧農が悪戦苦闘した姿を示している。(稲岡進「日本農民運動史」青木文庫)

この貧困は、全国的に見ても次表でうなずける。つまり、大正六・七年の不作である。

大正三年	四八五、九五二	二、四九、九二一	一、二七、〇四〇	八八〇、二六八	二五九、一〇〇	一三、二九七	四一、四六六	三、九一九
大正八年	四九三、五四三	二、四四、一六五	一、二七、八八二	八八七、七六六	二五三、〇六六	一三、六八二	四一、〇六三	四、二六八
大正十三年	四、九七〇、四四四	二、四七〇、一六三	一、三〇七、〇五三	八九〇、五七四	二五三、九三三	一七、〇八八	四七、六九五	四、九五〇
(昭和四年)	五、〇四〇、六四九	二、五八、九三三	一、三四六、三四五	八九九、五八〇	二五三、九八四	一三、四三五	四五、四四五	四、〇五七
(昭和七年)	五、一三〇、三三八	二、五八、〇八九	一、三六六、〇五〇	九〇三、四四五	二五三、三七七	一三、四四九	四六、三七〇	三、七六八

(本邦農業要覧)

米産額一覽表 (内地)

年次	收穫高	一反歩收穫高
明治三十九年	四、三〇三、五〇〇 _石	一・五九七
明治四十四年	五、七三二、四三三	一・七九元
大正五年	五、四三三、三六六	一・九〇三
大正六年	五、五六八、九三七	一・七六九
大正七年	五、七〇〇、一六一	一・七六九
大正八年	六、〇八八、六八八	一・九五九
大正九年	六、三三八、五四〇	二・〇三三

〔本邦農業要覽〕

またつぎの米価の動きによつても、証明され得る。

米価一覽表

年次	東京中米相場		大阪中米相場		内地主要市場中米平均	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数
明治三十三年	一一・九三	一〇〇・〇〇	一一・三三	一〇〇・〇〇	一一・三三	一〇〇・〇〇
明治三十八年	一二・八五	一〇七・六九	一二・四八	一〇八・三四	一二・六六	一一・八四
明治四十三年	一二・二七	一一・二三	一二・六九	一一・〇六	一二・九三	一一・三三
大正四年	一二・〇七	一〇九・五五	一二・九〇	一一・九一	一二・四七	一一・〇六
大正五年	一二・七六	一一五・三三	一二・九一	一二・〇六五	一二・二六	一一・二四
大正六年	一九・八四	一六・三九	一九・一六	一六・一八	一九・五五	一七・〇九三
大正七年	三・七五	二七四・五一	三・八四	二五〇・二四	三・八二	二八一・一〇
大正八年	四・九	三五・四九	四・三三	四〇〇・九五	四・四九	四〇一・八五

(明治三十三年以降の米価・「変動本邦農業要覽」)

(注2)

争議時の鳴海町の農業事情

耕作規模別		耕地所有規模別	自小作別			区分
			小	自	自	
二町 〃〃		五〇町 〃〃	五三町 〃〃	一五町 〃〃	五五町 〃〃	分戸数
五反以上 〃〃		五三町 〃〃	一五町 〃〃	五五町 〃〃	五五町 〃〃	
二五 〃〃		一五 〃〃	二五 〃〃	二五 〃〃	二五 〃〃	

愛知県農地史(前編)

(注3)

加古庄太郎は若いころ殺人罪を犯し網走刑務所に収容され、三十歳ごろ出獄、土建業を営むことになった、と伝えられている。

(注4)

御伺

大正六年より当町は雉本博士の後見にて小作人は地主を困難に落し入れ、小作争議は大正一二年三月九日まで継続して今日名古屋区裁判所の旁にて和解すれど其和解は地主に不利なるも、地主は多年掟米を小作人より不納に遣りきれぬ、又費用にも乏しくなり御仲裁の御無理なることは知つて応じたり。然る後我々共中産者は小作人より土地を貰ひ受け、自作致さね

ば地租初め諸税上納すること不能、依つて地所返還を小作人へ申せば鍬先料を支払へと云ふ。然るに小生地主として掟るときに鍬先料を小作人より出させる事更になし、依て地所を売り払はんとすれば貰手に向つて貰ふなり、先鍬料を出せとせまり、売るも不出来、困難極に達し、諸税上納に困難致しますから、何卒御政府にて相当の価格にて拙者所有地御買上は願ひまじきものか、又御買上の御赦さへ願へなくば御返納の御手続き乎、恐御指示下さいませ、最早地租初め諸税に付、小生も金一千五百円也の借金を致し、夫れが返金にも困難、依て田畑を所有し居れば老人及子供に氣の毒を致させます。今日地租を納めない土地所有せないものは小作人として又日雇人としても其得る処多大にして有福なる事、実に筆紙には記し難き有様、我が鳴海町又愛知県の如き人心の赤化せしを思へば最早、何たる事か、世の中の事万事不明になります。何卒右おくみとり下さり落ち行く中産の小生は（を）御救助下さる法方（方法）を御指示願ひます。

必ず狂氣の沙汰と御取捨て無き様、右の次第謹而御伺上候也

大正十二年四月二十三日

愛知県愛知郡鳴海町七三一番戸 中村重太郎 印

農商務大臣 荒井賢太郎 殿

農商務省はこれを愛知県知事に移牒、知事命によつてつぎの二通の文書をしめして事態を落着させた。

農第五〇四六号

農商務省農務局長 長 満 欽 司

大正十二年六月一日

愛知県知事殿

貴管下愛知郡鳴海町中村重太郎より本省大臣宛別紙写の通陳情有之、其後にも同様陳情有之候処。本件に関する小作争議は既に円満解決したる旨貴官より先に三月十九日付を以て御報告の次第も有之、又陳情書中の鍬先料云々に付ては其際和解条項にも有之候様被存候得共貴庁に於て適當とせらるる御措置相成度、尚陳情書中にある土地買上に付ては政府は目下、之が実行は不致候、又政府に対する所有地無償返納に付ては手續に付指示するは却て穩當を欠く様被存候条、本人に対しては主省は直接に何等示達不致疎間御含置相成度候、尚大蔵省にも同様陳情書の提出有之、同省より何等返事不致本省に移送し来り候、本人が斯く度々陳情提出する事情並に其当人等に付、何等か特殊のもの有之候はば為参考承知致置候此段申添候

(注5)

農商務大臣宛陳情の件、本人並びに警察其他に付き調査候処左記の通り此段及回答候

一、中村重太郎陳情書提出の事情——中村は田畑合して約八町歩を有し、往年小作に所有地を貸付し、地主として僅少の田畑を耕し、倅米に依り生計を営み來りたるも、大正六年度以来、作人は從來の慣例を破り倅米の歩引を請求し各地主に迫り、一般地主は其の要求不当に付き、之を容認せず、各種の仲介者ありたるも作人強硬にして未解決、倅米未納のまま數年を重ね來りしを以て収入の途も全く絶え、家計困難に陥入り、納税義務に支障を來し不得止負債を重ね來り、其の償還の途に所有地を売却せんとするも小作人より買手に向ひ銀先料を要求し、買手も手を控え目下売却することも出來ず、一面小作人の青年は何れも日雇労働をして都下に出で耕地返還するに至り。不得止自家經營をなさんとするも頼む労働者なく、空しく返還地は草生となすより致方なく茲に全く窮し陳情書を提出したるものなり

一、警察方面、其他の意嚮——大正六年以来、作人は地主に向ひ倅米の歩引を強要し、各地主を歴訪したる結果一部の地主は作人の要求を容れたるに中村重太郎は、其の要求に対し強硬に反対し、主要地主と共に作人に対抗したり、地主側は一部共同耕地整理をなし、之を直営し中村重太郎は其耕作部主任となれるを以て作人の常に反感を受け居り、大正十二年三月、愈々解決を告げたるも一般作人の青年は農業労働を厭ひ工場労働に転ずる傾向を示し耕地返還するもの漸く出で特に中村重太郎の返還地多きため本人としても仕末に困りかかる卒に出でたるものと信ず。

鳴海町倅米問題和解契約書（大正十二年三月九日締結）

契 約 書

第一条 地主小作人相互ノ親睦ヲ図リ且ツ農事ノ改良発達ヲ期スル為メ本契約ヲ締結ス

第二条 大正拾貳年度以降ハ各小作人ハ自己ノ耕作スル田地所有ノ地主ニ対シ左ノ倅ニ從ヒ毎翌年二月二十日限り愛知県産米検査合格米ヲ以テ倅米ヲ納入スルコト

- (一) 田地一反ノ收穫高二石五斗ナルトキハ全收穫高ノ四割五分ヲ納入スルコト
- (二) 田地一反ノ收穫高二石五斗未滿ナルトキハ收穫高一斗ヲ減スル毎ニ前記割合ヨリ一分宛減シタル割合ニ依リ納入スルコト

但シ收穫米ノ減高一年ニ滿タサルトキハ一年減シタルモノト看做シテ計算スルコト

一反ノ收穫高ハ地主小作人ヨリ十名宛ノ委員ヲ選出シ立会ノ上各字毎ニ坪刈検見ヲナシ五分摺トシテ定ムルコト
小作人ガ掟米ノ納付ヲ怠リタル場合ニ於テ地主ヨリ一ヶ月以上ノ期間ル定メテ催告スルモ猶ホ其納付ヲナサセル
時ハ小作人ハ其土地ヲ無償ニテ返還スルモノトス

第三条

地主ニ於テ耕地ノ返還ヲ求ムルカ若クハ土地所有權ヲ移転シタル際、新地主ガ本契約ヲ認メザル時ハ返還若クハ
移転當時ノ歟先ノ時価ニ相当スル金額ヲ地主ヨリ小作人ニ給与ス

但シ土地収用法ノ適用ヲ受ケル場合ハ之ヲ適用セス

公共ノ為メ地主ガ土地ノ所有權ヲ時価ヨリ低廉ニ移転スル時ハ地主、小作人ハ前項歟先ヲ斟酌シテ其給与額ヲ協定
スルコト

第四条

小作人ガ耕作スル權利ヲ他ニ譲渡スルトキハ地主ノ承諾ヲ得ルコトヲ要ス
但シ地主ハ正当ノ理由アルニ非サレハ右要求ヲ拒マサルコト

第五条

其他ノ慣例ハ従前通りトス

第六条

地主ハ小作人ニ対シ大正七年度分ノ未納掟米ヲ免除シ小作人ハ各自ノ耕作スル田地所有ノ地主ニ対シ左ノ割合方
法ニ依リ大正八年度、大正九年度、大正拾年度、大正拾一年度ノ各未納掟米ヲ支払フコト

(一) 大正八年度分ノ旧掟米ヨリ三割乃至五割ヲ歩引シタル割合ニ依リ納入スルコト
但各字ノ歩引割合高ハ別表第一号ノ如シ。別表中特別協議ヲ要スル部分ハ当該地主、小作人相互ニ前記標準ニ依

ラスシテ歩引高ヲ協定スルコト
但各字ノ歩引割合高ハ別表第一号ノ如シ。別表中特別協議ヲ要スル部分ハ当該地主、小作人相互ニ前記標準ニ依

(二) 大正九年度分ハ旧來掟米ヨリ三割歩引シタル掟米ヲ納入スルコト

但シ別表第貳号記載各字中沙入、水害、虫害ニ依リ特ニ不作ノ場所ニ限り当該地主、小作人間ニ於テ右標準ニ依
ラスシテ別ニ歩引高ヲ協定スルコト

(三) 大正拾年度、大正拾壹年度分ハ第二条所定ノ方法ニ依リ掟米高ヲ定メ納入スルコト（以下略）

第七条

名古屋区裁判所大正九年仮第四八号、第四九号、第五〇号仮差押命令ヲ以テ地主カ差押ヘタル米六拾壹俵ハ大正
八年度未納米ノ支払ノ一部トシテ地主ニ於テ受取ルコト

第十二条 本契約証書二通ヲ作成シ地主、小作人側ニテ各一通宛ヲ所持スルコト
大正十二年三月九日

「小作爭議史概要」 鳴海町土風会

「鳴海町小作爭議記錄」近藤邦雄私記

「愛知県農地史前編」愛知県農地開拓課

「思想の科学別冊四号」